

ミシェル・モラ・デュ・ジュールダン著
深沢克己訳

『ヨーロッパと海』

中 沢 勝 三

本書は、フランスのヨーロッパ中世史、海事史・海上交易史の権威であるミシェル・モラの手になる『叢書ヨーロッパ』のなかに収められた『ヨーロッパと海』と題する著書である。序を別にすると、全体が第一部「人間と空間の中のヨーロッパと海」と第二部「人間社会の中のヨーロッパ」から成っている。時間的には、古典古代から現代に至る三〇〇〇年をカバーし、空間的にはウラル山脈以西から西は大西洋を越えてグリーンランド、ニューファンドランド、南はアフリカに及んでいる。

第一部では、ヨーロッパとそれを取り巻く海との関係を、地中海を起点としつつ、やがて北方（北海・バルト海）へと至る空間の拡大のなかで、南方の人々と北方の人々の交流と共生の関係が歴史的に論じられる。その上で、第二部において、海がヨーロッパ史において演じた役割、そしてヨーロッパ人がどのように海とともに生きたのが問題にされる。

第一部では、まず地中海の先進性、次いでギリシア世界の都市海港と海洋国家、ローマの「われらの海」が語られる。そして、海図作成の技術がヨーロッパの世界制覇への予兆とされ、十一—十四世紀における対立抗争の舞台としての大西洋、それに権力拡大の要因が論じられ、コック船、フルク船の発明による大量の積み荷輸送の開発という北方の海の独自性が明らかになっていく。そして、北方への空間の拡がりのなかで、時代は中世から近世へ、やがて近代から現代へと進む叙述方法がとられていく。

北方の海に基盤をおくヘゲモニーとして十二世紀中葉からハンザ同盟が出現する。その大規模な拡張、商人の企業精神と船乗りの勇敢さは、地中海の大港湾都市の富と権力に比べられ、両者の結びつきによって、「近代ヨーロッパの海洋的特性がうまれる」。そして、十四世紀初頭までには、ヨーロッパ人は二大海域を直接結びつけるようになる。すでに十三世紀中に始まっていた地中海からの船舶往来である。ジェノヴァのガレー船がネーデルラント、イギリスに、ヴェネツィアのガレー船がフランドルに赴いた。イタリアとフランドルを両極とした「一種の世界経済」が生まれた。次いで、この東方からの流れとは逆に大西洋から地中海への航海が始まった。ハンザ商人やイギリス商船もこの航海に参画したが、しかし特筆すべき海上輸送人はバスク人とブルターニュ人であった。こうして大西洋は地中海と合流したのである。

本書のなかで最も多くのページを占めるのは、第五章「出会

いと分有」と第六章「枠組みの突破」の二章であり、内容的にも特に日本語の文献では見られない歴史的記述や指摘に富んでいる。五章では、ブリュッヘで行われた一四六八年のブルゴーニュのシャルル豪胆公の結婚式祝典の際の行進の様子がオリヴィエ・ド・ラ・マルシエの記述から引かれ、ヴェネツィアとフィレンツェ、ジェノヴァ、そしてスペイン商人がハンザ商人をまじえて進む印象的な光景が描写されている（二二八―九ページ）。さらに、南欧商人のブリュッヘとアントウェルペンにおける「居留地」コロニーにおける記述があり、またハンザ商館とヴェネツィアの「ドイツ人商館」、イタリア人とイベリア人の商人ネットワークが詳細に論じられている。そして、ここで十五世紀後半における、「ヨーロッパ実業世界の形成と凝集性」という論点が指摘され、南欧人のイニシアティブのもとにネットワークを持った一つの「世界」が取り上げられている点は重要である（一四一ページ）。著者はここで一つのヨーロッパの歴史的存在を強調しているように思われるからである。

第六章は、中世以降の海と国家の関わりを論じる。私的商人の活動から、次第に国家が海洋支配に目覚め、関与していくプロセスが、関税制度、指定市場、保護主義、重商主義政策など比較的われわれに馴染みのあるタームが使われ、よく知られている歴史経過でありながらも、日本の経済史学が付与している特定の学問範疇から自由に論じられているために、評者には新鮮に感じられた。

続いて、第二部では、「海」のヨーロッパ史における役割の

分析がなされる。「歴史的に見て、どのようにヨーロッパ人は海とともに生きたのか？」という問いである。この問いに、モラは、「海で働く人々」（七章）、「船乗りのヨーロッパ共同体」（八章）、「見なれたイメージ」（九章）、「文化的側面」（十章）の諸章を当てて考察している。地中海から大西洋、そしてニュウファンドランドに、そしてさらにそれ以遠へと拡大を遂げたヨーロッパ人の足跡を海との関わりでとらえなおす。詳細な内容は省かざるをえないが、しかしここでモラは、漁業と漁民の活動について、さまざまな諸側面を考察した上で、「活動の相互依存性と人間の必然的連帯」（二三―三ページ）、また海の民について、「強固な連帯と爆発的な敵対感情」（二五七ページ）を確認するのである。

第九章「見なれたイメージ」では、景観として、海図と海路書、灯台、外港などが論じられ、次いで精神的表彰が、恐怖や幻想、神話が問題にされる。十章では、海を扱った文学や音楽、そして海の科学が取り上げられる。

そして、最終章「結論―そして今は？」で、もう一度ヨーロッパ人にとっての海を持つ歴史的意味、「決定的要因」としての海が問い直される。最後に、「ヨーロッパの一体性は共通の文化に立脚し、海はその本質的要素を構成する」と締め括られているのである。

本書の評価と位置づけは容易ではない。ヨーロッパ史を対象とする叢書の一書として執筆されたためだけではないであろう。ヨーロッパ人の手によってヨーロッパを確認し分析しようとする

るその試みと手法が、個別の実証的成果と結論を急ぐわれわれに馴染みが薄いせいかもしれない。しかも、地理学の深い素養を前提とするフランス・アナール派の伝統を受けていて、記述そのものが詩的叙述となっている。

とはいえ、本書に繰りかえしあらわれる南欧人のイニシヤティブの指摘と、地中海と北方の海を接合する役割をフランス西岸、ブルターニュやバスクの人々に与えようとするのは著者の心性の発露といえるのだろうか。近代において「国民国家」によって分断されたヨーロッパの歴史的発展を、領土ならぬ「海」

——それを普遍性を持つ海と著者は言い直すのだが——の視点から見直すことによって、改めてヨーロッパ世界の強固な共生と統合の本来の姿を確認させてくれるという意味で日本人の手によって描くことの難しい作品となっている。評者の本書に対する評価はこれまでの紹介そのものに込めたつもりである。今後、ヨーロッパ世界を考察する上で、またヨーロッパの一体性を考察する際の必読の書物が現れた。翻訳はこなれていて読みやすい。

(平凡社、一九九六年九月、三九五ページ、三八〇〇円)